



## 福島県南相馬市における東日本大震災後の大腸がん 市民検診の参加率の長期的な傾向の解析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-10-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 宏章 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000411">https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000411</a>

# 論文内容要旨

しめい 氏名	さいとう ひろあき  齋藤 宏章
学位論文題名	福島県南相馬市における 東日本大震災後の大腸がん市民検診の参加率の長期的な傾向の解析
<p><b>【背景】</b> 便潜血法を用いた大腸がん検診は、大腸がん死の予防を目的として行われる。大腸がん検診を有効的に行うためには、1次検診（便潜血法）における対象集団の検診受診率を高く維持することが重要である。このため、高い参加率を保つための方策や、参加率の低下を妨げる因子の特定は有効な大腸がん検診を行う上で重要な課題である。大規模災害後には長期的に日常の医療に支障が出ることが知られているが、がん検診のような予防的な取り組みに対する影響に関しては十分な評価が行われてこなかった。今回の研究では南相馬市における大腸がん市民検診の受診率の長期的な傾向を明らかにすることで、がん診療における震災後の中長期的な課題を明らかにすることを目的とする。</p> <p><b>【方法】</b> 南相馬市の10年間の大腸がん市民検診の受診率の推移を分析した。2009年から2018年の年度毎の大腸がん検診受診率を算出し、検診受診に関連する要因を分析した。40歳から74歳の方を対象に解析を行い、性別、居住区（小高区、鹿島区、原町区）、年齢、世帯状況（独居、同居あり）、2011年以降の避難状況の因子と参加の関連についてロジスティック回帰分析を実施した。また、2009年と2010年の大腸がん市民検診への参加状況をもとに、対象者を群別し、震災前の大腸がん市民検診への受診動向別の、2011年以降の大腸がん検診参加率の推移や参加に与える因子の解析を行った。</p> <p><b>【結果】</b> 2009年に4069人（12.3%）、2010年に3839人（11.7%）が大腸がん市民検診に参加していたが、震災が発生した2011年には参加人数は1090人（3.4%）と減少していた。参加率は2012年も低下した状態が継続し、2013年に震災以前とほぼ同等の水準まで回復していた。2009年と2010年では共に、男性、40歳から64歳、独居、が大腸がん検診不参加と統計学的に有意に関連していた。これらの因子に加えて、2011年から2018年までのすべての年において、避難は大腸がん検診の不参加と有意に関連していた。震災前の検診参加状況に基づく群別の解析では、2011年の大腸がん検診受診率は、2009年と2010年の2年とも大腸がん検診を受診した群の参加率は22.6%と、1年のみ受診した群（10.9%）や一度も受診しなかった群（1.0%）に比べて最も高かった。全期間の分析では、すべての群で男性の性別と避難の状態が検診不参加と関連していた。</p> <p><b>【結論】</b> 南相馬市では大腸がん検診受診率は震災後に大きく低下し、その後3年間かけて回復していた。避難していることは長期的に検診不参加に関連する因子であった。本研究は東日本大震災のような大規模災害時における中長期的ながん検診への課題と共に、この研究で示された震災後の大腸がん検診受診率の低下がもたらす、長期的な影響の分析の必要性を提示する。</p>	

※日本語で記載すること。1200字以内にまとめること。

# 学位論文審査結果報告書

令和4年 8月 8日

大学院医学研究科長様

下記のとおり学位論文の審査を終了したので報告いたします。

## 【審査結果要旨】

氏名 齋藤 宏章

所属 放射線健康管理学講座

学位論文題名

福島県南相馬市における東日本大震災後の大腸がん市民検診の参加率の長期的な傾向の解析

大災害や、新型コロナウイルス感染症のようなパンデミック下では日常の医療に支障が出ることが知られているが、がん検診のような予防的な取り組みに対する影響に関してはこれまで十分な知見がない。本研究では、福島県南相馬市を対象に、東日本大震災前後 10 年間の大腸がん市民検診の受診率の推移及び参加に与える因子を分析した。その結果、震災前は対象者の 11.7%~12.3%が大腸がん検診に参加していたが、震災が発生した 2011 年は 3.4%、2012 年は 6.1%と減少し、その後 2013 年に震災以前とほぼ同等の水準 (10.2%) まで回復していた。また、2011 年以降のすべての年において、避難している状況は大腸がん検診の不参加と統計学的に有意に関連していた。2011 年の大腸がん検診受診率は、2009 年と 2010 年の 2 年とも大腸がん検診を受診した群の参加率は 22.6%と、1 年のみ受診した群(10.9%)や一度も受診しなかった群 (1.0%)に比べて最も高かった。

以上のように、齋藤宏章氏は、東日本大震災の影響を強く受けた南相馬市では大腸がん検診受診率は震災後に大きく低下し、その後 3 年間かけて回復していた状況を明らかにした。また、避難していることは長期的に検診不参加に関わる因子であったが、震災前に健診を経年的に受診していた人の震災後の検診受診率は高いことを明らか

にした。本研究は災害後のがん検診受診率の推移をみただけでなく、災害後のがん検診受診率の低下を防ぐためにどのような対策を行うべきかについて示唆する社会的に重要な研究と考える。本研究は、令和4年7月5日に開催された学位論文審査会において、研究内容が丁寧に示された。審査会では、結果の一般化、統計解析手法等に関する質問が出されたが、齋藤宏章氏はそれぞれの質問に対して的確に回答するとともに、論文を適切に修正した。本研究は、いくつかの **Limitation** はあるものの、本論文の新規性、社会的意義は十分なものであり、これらのことから本研究は本学医学博士授与に値するものと判断できる。

論文審査委員 主査 大平 哲也

副査 後藤 あや

副査 日高 友郎